

北の食材の宝庫で、若い家族と全小学校に広がる教育ファーム 「わが基幹作物を体験、みんなで祝う収穫祭も盛りあがる」

農業を基幹産業とし、もち米やカボチャ、ジャガイモ、グリーンアスパラガスなどなど食材の宝庫、名寄市。有機農業の実践者・研究者が指導する一般公募には小学生家族が参加し、野菜の栽培・収穫・保存加工を体験し、本当のおいしさをしっかり刻み込む。学校の取組みは全小学校に広がり、名寄の基幹作物と収穫祭料理向けの野菜栽培に全学年で当たる。人びとを招いての収穫祭・学習発表会は、地域の農・食の豊かさを確かめ合い、伝え合う場になっている。

なよろ食育推進ネットワーク

取組主体

名称：なよろ食育推進ネットワーク

担当窓口

担当課(者)：(財)微生物応用技術研究所名寄研究農場

菅原 啓順

住所：北海道名寄市智恵文7線北2

電話：01654-8-2722 FAX：01654-8-2810

E-mail：moa-nayoro@moa-inter.or.jp

団体等の属性：その他(任意団体)

コーディネーター等：本ネットワークがコーディネーター役を担う

活動内容を紹介するHPアドレス：<http://www.syokuiku.gr.jp/>

連携団体及び協力団体

属性：農林漁業者、農林漁業に関する団体、学校(小中学校、大学)民間企業、その他(地元新聞社)

内訳：地域の農業者6名(元市議会議員、元農協組合長など)名寄市立大学、智恵文小学校、東風連小学校、風連下多寄小学校、風連日進小中学校、中名寄小学校、MOA自然農法上川北部普及会、ライオンズクラブ、味菜の会、(財)微生物応用技術研究所名寄研究農場



北の大地の「教育ファームちびっこワンダーランド畑の学校」の参加家族と指導者

取組地域及び地域の特色

取組地域：北海道名寄市

地域の特色：

名寄市は、北北海道の中央に位置し、天塩川と名寄川の恵みと豊かな自然にあふれた環境にあり、農業を基幹産業とする。夏冬の寒暖差が60 に及ぶ気象条件を有し、雪質日本一の「名寄ピヤシリスキー場」、道立公園サンピラーパーク内のカーリング場、自然現象「サンピラー(太陽柱)」と冬の魅力が数多くある。平成18年3月、旧名寄市と旧風連町との合併により新名寄市が誕生。新名寄市総合計画は、「星・雪・きらめき 緑の里なよろ」をキャッチフレーズに、市民協働・健康・生活・活力・人づくりの五つのキーワードを基本理念とし進められている。18年に名寄市立大学(保健福祉学部)が開学し、また22年にはなよろ市立天文台「きたすばる」が開設され、大学・天文台を核とした道北の教育文化の拠点となることを目指している。

名寄市は食材の宝庫。もち米は平坦で肥沃な土壌と水利に恵まれ、作付面積・生産量ともに「日本一」を誇り、風連地区を中心にするち米も作付けしており、有数の米地帯である。また、畑作物ではカボチャ・ジャガイモ・スイートコーン・小麦・豆類など広く作付けされ、北海道一のグリーンアスパラガスや長ネギ、イチゴ、ゆり根、トマト、ピーマンなどの施設園芸作物を中心に安全・安心の高品質な作物が収穫されている。

取組内容

(1) 目的(目標)

農業は、人が生きていく上で必要な食べものを生産するだけでなく、自然の恵みと生きものに接することができる生命産業であり、子どものうちから土や作物に触れることによって、自然界には命あるものを成長させる

大きな力があること、その命によって自分は生かされていることなど、自然や命を尊ぶ心、食べものへの意識が高まることが期待できる。また、農業者の努力や農業そのものへの理解が深まり、感謝の心も芽生えてくる。さらに、作物は人の手の掛け方によって成長の仕方が違ってくることから、子どもたちの創造力を養うことにもつながると思われる。農業体験を通して子どもたちが心身ともに健全で心豊かに育っていききっかけになることを願い教育ファーム事業を実施した。

(2) 取組開始時期・経緯

国の食育基本法制定を受けて、平成18年6月、なよろ食育推進ネットワークが発足。発足後は、毎年1回、「掘っちゃらんどin智恵文」という食育と地産地消の推進を目的としたイベントを(財)微生物応用技術研究所名寄研究農場とともに開催。併せてMOA自然農法上川北部普及会と共催で一般の主婦を対象に家庭菜園セミナーも行なっている。平成20年3月、名寄市が「名寄市食育推進計画」を策定。同ネットワークとして計画策定プロセスに関与した。平成20年度、平成21年度教育ファーム推進事業の実証モデル地区に応募し採択される。具体的な内容は、「ちびっこワンダーランド畑の学校」と名づけた一般公募型の取組みと、智恵文小学校および東風連小学校を対象にした学校型の取組み。平成22年度は、風連下多寄小学校、風連日進小中学校、中名寄小学校を加えて学校型の取組みを全5小学校(1校は小中学校)に拡大した。学校型の取組みは、名寄市教育長と当該校校長の多大な理解と協力により実現。いっぽう、地域の老人クラブには、小学校における農作業指導の協力を依頼した。

(3) 対象作物(平成22年度)

【ちびっこワンダーランド畑の学校(一般公募)】

野菜

作物名・種類：ジャガイモ、トウモロコシ、カボチャ、トマト、ミニトマト、カラーピーマン、ナス、ダイコン 計1,000㎡
 選定理由：地域の基幹作物、子どもたちの認知度の高い野菜、家庭菜園でつくれる、という観点から選定。また、作物の選定に当たっては、「種から播くもの、苗から植えるもの」、「おしべとめしべの関係」などにも配慮。

【学校の教育ファーム】

野菜栽培タイプ(1校 智恵文小学校)

野菜

作物名・種類：ジャガイモ、タマネギ、ニンジン、トウモロコシ、長ネギ、キャベツ、トマト、スイカ、ピーマン、ダイコン、他 計200㎡
 選定理由：収穫祭のメニュー(焼きうどん、豚汁、カレーライス、野菜炒め)に必要な作物、地域で多くつくられており子どもたちが興味を持つ、という観点から選定。

もち米と野菜栽培タイプ(4校 東風連小学校の例)

米、野菜

作物名・種類：米、ジャガイモ、カボチャ、タマネギ、ニンジン、トマト、キュウリ、ナス、スイカ、エダマメ、他 計260㎡
 選定理由：地域の基幹作物、収穫祭およびもちつき集会のメニュー(カレーライス、サラダ、雑煮、納豆餅、他)に必要な作物、地域で多くつくられており子どもたちが興味を持つ、という観点から選定。

その他の学校での選択理由として、調べ学習に必要な作物(風連下多寄小学校 米・麦など)、指導生産者との交流・競争(中多寄小 メロン・スイカ・サツマイモなど)などがある。

(4) 具体的な取組内容

【ちびっこワンダーランド畑の学校】

基本的には、圃場区画を家族ごとに提供し、それぞれの家族に一人の指導者を置くが、参加する家族数と指導者数のバランスによって、2～3家族を一つのグループとして一人の指導者がつく場合もある。指導に

は有機農法・自然農法に取り組むプロ生産者と事務局担当者が当たる。参加者募集の方法は、新聞記事掲載と幼稚園、小学校への案内。小学校については、名寄市教育長の配慮により、学校教育課を通じて各小学校の1～2年生に案内チラシを配布。



ちびっこワンダーランド畑の学校 うれしい!! トモモロコシの収穫

【学校の教育ファーム】

学校によってそれぞれ特徴があり、農作業については地域の老人クラブおよび教員の指導、あるいは地域の生産者または保護者(生産者)および教員の指導を受けている。下多寄小学校では、保護者および教員の他、水稻については農業改良普及センターの指導も受け、調べ学習については、教員および生産者の指導・協力を仰いでいる。



学校の教育ファーム



地元の方々の応援で野菜づくり(東風連小学校)

(5)年間スケジュール(平成22年度)

【ちびっこワンダーランド畑の学校】

6月 入学式、各種作物の種まき、苗植え

6月～8月 観察、草取り、間引き、花の寄せ植え、ミニ実験、押し花づくり、収穫、料理セミナー聴講など

9月 卒業式、収穫祭、押し花の菜づくり

<課外授業>

10月 ダイコンの収穫・洗い・干し、漬け物づくり、ジャガイモ埋め(越冬貯蔵)

3月 越冬ジャガイモの掘り出し・試食

【学校の教育ファーム】

野菜栽培タイプ(1校 智恵文小学校)

5月～6月 種まき、苗植え

6月～8月 観察、草取り、間引き、収穫など

9月 収穫祭(活動発表会)

もち米と野菜栽培タイプ(4校 東風連小学校の例)

5月～6月 田植え

6月 野菜の種まき、苗植え

- 7月～8月 観察、間引き、草取り、水やり、収穫など
- 9月 野菜収穫、収穫祭
- 9月～10月 稲刈り
- 11月 地域参観日(調べ学習発表会、餅つき集会)



収穫祭は「日本一」のもち米で、数々の餅料理
(風連下多寄小学校)

【全体報告会の開催】

なよろ食育推進ネットワークの活動報告会のなかで、教育ファームの取組みを報告している。報告会には市長、教育長、当該校長、市議会議員、市議、学校給食センター、保健センター、保健推進員、指導生産者、農業者などが参加。

(6)実績及び推移

一般公募「ちびっこワンダーランド畑の学校」は、平成21年度は12家族47名(子ども25名、保護者22名)、名寄在住がほとんどだが、土別市からも1家族参加。平成22年度は8家族32名(子ども16名、保護者16名)、全て名寄市民。学校の取組みは5校とも全校児童の活動として行なわれ、智恵文小学校が平成21年度28名、22年度30名、東風連小学校が21年度14名、22年度14名、風連下多寄小学校が22年度17名、風連日進小中学校が22年度11名、中名寄小学校が22年度18名となっている。

(7)経費

平成21年度

全ての取組みを合わせて年間100万円の予算規模(農林水産省のモデル事業)。ちびっこワンダーランド畑の学校は、参加費(年間)1家族当たり1000円。この他に、オプションの課外授業1回当たり500円。

平成22年度

年間70万9000円の必要予算に対して、北海道上川総合振興局地域づくり推進事業から30万円、名寄市の食育関連補助金から17万7000円。差引23万2000円を団体に負担。地元ライオンズクラブのメンバー、その他に働きかけ、協賛金を募った。ちびっこワンダーランド畑の学校は、1家族当たり5000円、別途オプションは500～1000円。

課題及び対処方法(ポイント・工夫)等

関係者(団体)との連携の経緯

小学校との連携や補助金の申請などで行政に協力をいただいているが、事業の継続実施に向けて、民間レベルの取組みから行政主体の取組みへと発展することを願い、今後も名寄市と協議をつづけていく。ちびっこワンダーランド畑の学校では、関係者が協議して年間プログラムを決定。個別のプログラムの細かい内容は、農文協のマニュアルや研究農場職員の意見を参考に決定。学校の取組みでは、収穫祭の料理に必要な作物を子どもたちが話し合って決めているケースが多い。

連携を進めるに当たっての課題と対処方法

連携団体との連携が一部にとどまった。名寄市立大学の協力で行なっている効果測定結果、および指導者や参加者の反響や変化を整理し、行政や小学校他、連携団体と教育ファームの有効性を確認して連携の在り方を検討する。自立した活動を行なうためには資金の確保が重要。参加費の設定を再検討する。初年度は参加者募集の案内が小学校低学年の保護者に行き渡らなかった。平成22年は教育委員会を通して市内全小学校に案内した。取組みの充実と拡大を図るため、事務局体制の強化が必要。

コーディネーターの存在

なよろ食育推進ネットワーク

ほ場での運営の課題と対処方法

ちびっこワンダーランドにおいては、平成22年度は作付品目を減らした。これは、大学の先生からのアドバイス。いっぱい品目があると、子どもが覚えきれず大変なため。稲作体験用の水田確保が課題となっている。

これまでの成果

ちびっこワンダーランド畑の学校を通して

参加者の反響から、汗を流して自分で作物を育てる体験によって「嫌いな野菜が食べられるようになる」「新しい発見と感動がいくつもある」「食べものを大事にする心が醸成され、家族の会話が増えることによって家庭における食育にもつながる」「農業を身近に感じられる」ことが分かった。また、農業指導者の皆さんは、子どもたちが楽しく参加して嫌いな野菜を食べるようになったなどの結果を受けて、農業の形態に関わらず、子どもたちに実際の体験を通して農業を伝えていくことに大きな喜びと必要性を感じられた。何より、参加した家族の皆さん一様に喜んでいて、特に子どもたちがひとつひとつの体験に興味を持ってくれたこと、そして、広々とした農場で嬉々として走り回っていたことは、主催する私たち自身の喜びであり学びとなった。また、トマトやキュウリなど、とってその場で洗わずに食べられることは、農薬を使用しない有機農業・自然農法ならではの利点であった。これらのことを通して、いのちに接する農業体験をすることが食育はもとより、子どもたちの心を豊かに育てる情操教育に有効であり、また、地域の基幹産業である農業を中心とした、心豊かなまちづくりにもつながることがうかがえた。

名寄市立大学による効果測定の結果は、今後公表されていく予定。



畑で食べて、野菜嫌いもなくなる

今後の構想、課題

近年、食べものと健康について社会的な関心が高まってきており、環境や作物に安心して触れることができている。その場で食べられる有機農業・自然農法は、その農産物が人の健康に良い効果をもたらすといわれている。

今後、農業体験の有効性と有機農業・自然農法の利点を踏まえた教育ファーム事業を継続し、幼児教育における農業体験への支援体制の推進、農業体験と連動した家庭菜園および地産地消の推進、有機農業・自然農法および農医連携の推進、を図りながら名寄市が願う、健康で豊かな住み良いまちづくりに貢献したいと考えている。

そのためにも、行政をはじめ関連団体との協働による官民一体となった取組みに発展するとともに、学校教育における農業教育がさらに充実されることを願っている。

その他

平成21年の取組み開始に当たり、地元新聞社(北海道新聞、名寄新聞、北都新聞)を対象に記者会見を開いた。それ以来、ちびっこワンダーランド畑の学校および小学校の農園活動は、教育ファームとして主な実施日には必ず取材を受け、各社新聞に掲載されている。

なよろ食育推進ネットワーク

みんなのコメント集

取組の
実践者

農業指導者

感想

- ・参加された皆さんが一生懸命に畑に出てくれて、そして子どもたちがこんなに楽しんでくれるとは想像していなかった。印象深かった。
- ・皆さんと一緒に種まきから管理、収穫、そして食べるところまでできて嬉しく思う。
- ・初心者の方が多かったので不安もあったが、子どもたちが野菜を食べられるようになった、おいしかった、という声を聞いて本当に良かったと思うと同時に、自分自身が学びになった。
- ・初心者の皆さんに農業を教えるのは意外と難しいと感じた。

意見

- ・地域の産業や経済を発展させるためにも、あらゆることに関わっている農業を通じた教育はとても重要。そのためにも子どものうちから作物の栽培を体験することは大切だと思う。自分の子どもにも、農業を教える時間がなかなか取れない。
- ・学校教育のなかにもおおいに農業を取り入れていくべきだと思う。

名寄市立大学

農業体験によって嫌いな野菜が食べられるようになった、多く食べるようになった、というのはなぜだろうという研究が進められているが、要因としては野菜は生きており、いのちがあるということを実感したためだろうといわれてきている。

参加者

感想

- ・初心者にも分かりやすく、基本的なことから豆知識まで教えてもらえて楽しく勉強できた。
- ・作物を育てるにはたくさんの手間がかかることが分かった。
- ・家族でこのような時間を持つことができ良かった。
- ・子どもたちのために参加したが、親も勉強になった。
- ・自分でも家庭菜園を始めていきたい。

家族の変化

- ・子どもたちが食べものへの関心を高め、野菜嫌いが少なくなった。
- ・1歳の子がトウモロコシを丸々1本と、ジャガイモを2個食べた。
- ・4歳の子が家で父親に楽しそうに体験したことを報告していた。
- ・子どもたちが土や虫にも慣れて楽しそうにしていた。また、自分でとったものは普段よりおいしいといっていた。

要望、提案

- ・学校ではできないすごく良い体験だったので、来年はもっと多くの家族が参加できたら良いと思う。
- ・家庭菜園のコツやおいしく育てる方法、土づくりの方法など、農業の基本をさらに教えてほしい。
- ・子どもたちが畑や農作業風景を写生するようにしてはどうか。
- ・取組みの回数をもっと多くしてはどうか。
- ・来年も続けてほしい。

巻頭の取材記事(5頁)先あわせてご覧ください。